



「ペスト医者 plaque doctor」

院長 西 田 敬

イタリア語でmedico della pesteと云う。間違ってもイタリア料理店で叫ばぬ様に。Pasta料理と間違えられる事、請合い。「生憎、ノストラダムスを一品しか取揃えは御座いませんが」と切返されれば、そのイタ飯屋は、味は兎も角、ウィットは秀逸。その昔、14世紀はルネサンス以前のヨーロッパは無知蒙昧の真只中、知性はsiestaに微睡眠、呪縛的因習が蔓延って罷り通り、まるで暗黒大陸。天罰觀面に降って涌いたペスト禍。珍重されたのが龍舌蘭などの香料（Tequilaの香り）を詰込んだ鳥の嘴状のマスク。之を着用し、直接は触れずに患者を突く為の杖を手に、ハロウインの仮装擬の奇怪な風体のペスト医者。と言ってもアミノ配糖体など有効な抗生物質はない時代、患者の枕元で御託宣を宣うものの、治療の本態は罨法と瀉血のみ。当然ながら治療成績は惨憺、実際の責務は引導

の渡し役。日本で有名なノストラダムスも謂わばノートルダムスのペスト医者。ところで、Renaissanceを文芸復興と宣わった翻訳は誤訳とまでは言わないものの、迷訳中の珍訳。文明開化とでも訳した方が余程まし歟。

惨憺たる治療成績といえば卵巣癌。今年の7月に有名誌Cancerが最早、真面には戦わずに、癌から身を躲す戦略、即ちrisk reducing surgery（危機回避手術：RRS）を推奨した。溯って2010年には更に影響力がある有名医学誌、JAMAが乳癌の好発家系に対するRRSの効果を掲載。乳癌発症の確立が高い変異BRCA遺伝子の保持者247名に於ける癌の発生をゼロに抑え込んだ。満点の予防効果と云う可き歟。

茲で一言、是非ともお断りが必要なのは遺伝子。変異や、癌化など諸悪の根源の如き印象だが、本来は細胞の分裂や分化を采配する正義の味方。精子と卵子の接合で生じた接合子（zygote）は分裂して2個の割球 blastomere。分裂は進みmulberry-shapedのMorula形成。子宮腔内に入る（4日目）と細胞間に液が貯留しblastocystを形成する。細胞分裂や再構築、細胞分化の方向性、役目を果たした細胞の寿命の決定などは全て遺伝子に組込まれた設計図に従う。ヒトの染色体構成を厳密に管理。何かの拍子で齟齬が出ると、運命に釘の掛違えが生じる。

上皮性卵巣癌を前にして責務がペスト医者並とは情けない。卵巣近傍の外分泌機能を持つ細胞を刮目して具に見直し、癌化の真犯人を見極めねばならぬと念ずる。

